



Title	勇払原野一帯の鳥類相
Author(s)	石城, 謙吉
Citation	北海道大學農學部 演習林研究報告, 44(2), 689-713
Issue Date	1987-07
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/21226">http://hdl.handle.net/2115/21226</a>
Type	bulletin (article)
File Information	44(2)_P689-713.pdf



[Instructions for use](#)

# 勇払原野一帯の鳥類相

石城謙吉\*

Avifauna of Yufutsu Moor and its Around Area

By

Kenkichi ISHIGAKI\*

## 要 約

勇払原野一帯に見られる鳥類について、筆者自身のものを含むこれまでの諸報告と観察記録をとりまとめて目録を作製した。

その結果、この地域にはこれまでに北海道全体で記録された鳥の約7割にあたる18目51科277種の鳥が記録されていることがわかった。

この地域で記録された鳥の種類数が多い理由として、1)この地域には海浜、湿原、湖沼、森林などの多様な生息環境があるために海鳥、淡水性の水鳥、草原性の鳥から森林性の鳥までが見られること、2)この地域が日本列島における水鳥の渡りの重要なルートであるためにここを通過する旅鳥の種類が多いこと、3)石狩低地帯が北海道の生物相の上で西南部の温帯性の要素と東北部の亜寒帯性の要素の錯綜する場所になっていること、4)この地域にはウトナイ湖ネイチャーセンターと北大苫小牧演習林があり、この二つを重要な拠点としての研究者、バードウォッチャーの活動が盛んであるために稀少種や迷鳥の出現がよく把握されていること、などが考察された。

豊富な種類、集積されてきた調査資料の両面から、北海道における鳥類研究とその保護活動の拠点としてのこの地域の重要性を指摘した。

キーワード： 鳥類相、勇払原野、自然保護。

## 1. はじめに

1974年に出版された日本鳥学会編纂の日本鳥類目録の改訂第5版には、日本で記録された野生鳥類として490種626亜種が記載されている。さらにその後環境庁の依託によって日本野鳥の会が行った全国調査の記録(環境庁、1980)などをあわせると、日本ではこれまでに523種

---

1987年2月28日受理 Received February, 1987.

\* 北海道大学演習林

College Experiment Forests, Hokkaido University.

の鳥類が記録されている。

北海道についてみると、前記鳥類目録に含まれるものにその後の記録を含めた種類数は388種となっており(野生生物情報センター, 1985), さらに1985年の冬に北海道大学苫小牧演習林内で観察されたオジロビタキ *Ficedula parva* を加えるとこれまでに389種が記録されたことになる。

北海道内におけるこうした野生鳥類の記録は、かつては一部大学の研究者や本州の鳥学者らによる報告が散見される程度であったが、近年になって全道規模のものを含む各種の調査が盛んに行われるようになり、北海道における野鳥に関する記録は、従来にくらべて著しく整備されたものになってきている。

こうした調査が推進されるようになったのは、一つは環境庁の主導のもとに道、各市町村が動植物相調査を行うようになったことである。昭和53, 54年に行われた自然環境保全基礎調査は、道内における野鳥各種の分布を把握するうえで大きな成果をあげたといっている。さらに北海道自身による国立公園などの調査も進められ、また道内各地の博物館等による地域の鳥類相調査も盛んに行われるようになってきている。一方、これら国・道・市町村等による調査と並んで、日本野鳥の会をはじめとする野鳥関係団体の活動も著しく活発なものとなっており、野鳥の会による毎年2回(4月, 9月)のシギ・チドリ一斉調査、白鳥の会による定期カウント、さらに道内各団体が参加してのオジロワシ・オオワシ一斉調査などが毎年行われている。

こうした動きの中で、勇払原野一帯を含む苫小牧地域は、近年きわめて重要な存在となっている。それは、一つには昭和56年にウトナイ湖とその周辺の511 haが日本初のバード・サンクチュアリとして日本野鳥の会により設定され、この中に建てられたネイチャーセンターに常駐するスタッフによる野鳥の観察・記録が始められたことである。またもう一つは、苫小牧市郊外に2,715 haの林地を擁する北海道大学苫小牧演習林の存在である。ここでは昭和42年に全域が鳥類保護区に設定され、46年からは筆者ら北海道大学の研究者による鳥類研究が続けられており、野鳥の誘致・繁殖に関する試みも10余年にわたって積極的に行われてきている。さらに、苫小牧地方には古くから全道にさきがけた野鳥保護の動きがあった。昭和36年にウトナイ湖の白鳥の保護を目的とする白鳥保護委員会が苫小牧郷土文化研究会の呼びかけによって作られ、その後活動が市郊外のアオサギ・コロニーの保存にも発展する中で、47年に苫小牧自然保護協会が結成され、さらに54年には日本野鳥の会苫小牧支部が組織されている。ネイチャーセンター、北大苫小牧演習林の存在に加え、これらを主要なフィールドとするこの日本野鳥の会苫小牧支部などの活動が盛んなこともあって、苫小牧地域は現在北海道内で野鳥に関する記録の最も多く集積された場所になっており、北海道における野鳥の観察・研究の最大の拠点として道内外の各地から多くの関係者がこの地域を訪れる状況にまでなっている。

そこで日本道路公団からの受託研究「北海道における道路計画と森林環境の保全に関する調査研究」の一環として北海道大学苫小牧演習林を中心とする自然環境についての基礎的調査

を行うことになったのを機会に、この演習林におけるこれまでの調査結果をはじめ、この地域全般における各種の調査資料を集めて勇払原野一帯の鳥類相をまとめることにした。

## 2. 勇払原野一帯の自然

勇払原野は、渡島半島とその北側の西部北海道火山地域を含む北海道西南半島部とエゾ山系を背陵とする北海道胴体部の間を南北に走る石狩低地帯の、太平洋岸の部分である。一般に西は苫小牧から東は鶴川にかけて、また北は美々ないし千歳から南は太平洋岸にいたる範囲をいっている(藤田, 1973)。ウトナイ湖をはじめとする大小の湖沼を含む沖積平坦面である低湿地とそれをとりまく美々台地をはじめとする低い台地が多く部分を占め、その東側は樽前山のなだらかなすそ野となり、西側は夕張山地と接している。この勇払原野の地形は過去海退期の浸食によって作られた谷地形に海進期の砂泥が堆積することによって形成されたものとされており、そのことを示すものとして、この原野の低湿地には今も多数の砂丘跡が残されている。

地質は低湿地帯は沖積層、また台地や樽前山麓部の多くは第3紀中新統を基盤としてその上に支笏・樽前火山群からの歴代の噴出物が多数の層をなして堆積したものである(中尾, 1939)。

一方、この地域一帯の気象上の特色は、その冷涼さにある。冬期には大陸方面からの冷たい北西季節風が吹きこみ、また繰り返し厳しい寒波が押しよせ、気温は零下20度をこえることが珍しくない。また冬期は晴天が多く、そのため低温と寡雪があいまってこの地域一帯に裸地では70cmをこえる土壌凍結をひきおこす。また夏期はおホーツク海高気圧の勢力下にはいるため、冷涼で陰うつな日が多くなり、夜には海岸地域に特有の海霧が頻繁に発生する。この地域の年平均気温は約6.5度、また年間雨量は1,200~1,400mmでそのおよそ75%が夏期に集中している。

こうした環境条件の上に成立するこの地域の植生についてみると、海岸線一帯ではハマペンケイソウ、ハマボウフウ、ハマエンドウ、シロヨモギなどをはじめとする海浜性植物が見られるが、内陸の低湿地ではヨシ、スゲ類を優先種とする湿地性の植物群落になっている。中居(1973)によれば、勇払原野の低湿地ではこれまでに239種の草本、灌木類が記録されており、その中では低層湿原性の種類が多いが、沼地—湿地—乾燥地性へと続く群落の遷移も認められている。

しかし台地に近い地域ではハンノキ、エゾノコリンゴ、イヌコリヤナギ、ノリウツギなどの木本が目立つようになり、台地上はコナラ、ミズナラ、ヤチダモ、シラカンバ、キハダなどからなる落葉性広葉樹林になっている。

さらに苫小牧演習林を含む樽前山麓地帯になると、天然林はミズナラ、ハリギリ、シナノキ、イタヤ類などをはじめとする多様な落葉性広葉樹にエゾマツを混じえる広過混交林となっていて、工藤・吉見(1916)は大正期に演習林内で104種の木本を含む259種の植物を記録して

いる。

こうした勇払原野を含む、石狩低地帯の植物相を生物地理学的にみた場合の特色は、サハリン、千島經由と目される亜寒帯要素と本州東北部と共通する温帯的要素が重なりあっていて、しかもそれらの中にはこの石狩勇払低地またはその附近に分布限界を持つものがあることである。たとえばコナラ、サンショウ、クリなどはこのあたりを分布限界として北海道の胴体部にはほとんど見られない。こうしたことから、かつて館脇(1940)は、北海道の植物相は石狩低地帯を境にして二分されるものとしている。

これと同様なことはこの地域の動物相についても古くから着目されている。河野(1933)は北海道の昆虫類には石狩低地帯の東北側のみ産して西南側に産しないものや逆に西南側に産して東北側には産しないものが少なくないことを認め、たとえば蝶類では前者としてカラフトヒョウモンほかの7種を、また後者としてはオオムラサキほか5種をあげて石狩低地帯が北海道における昆虫類の分布上大きな意義をもつものとしている。この地域の昆虫類には湖沼・湿原性ものから森林性のものまできわめて多様な種類が含まれているが、湿原に多いアブ類などにも蝶類の場合と同じ二つのグループが認められている。さらに淡水魚についても、これと似たことが認められる。この地域の淡水魚にはギンブナ、コイ、チブなど湖沼性のもの、ドジョウ、イバラトミヨなど低湿地流性のものからヤマメ、アメマスなど溪流性のものまで、北海道の淡水魚の大部分のものがみられるが、その中で、北海道における数少ない純淡水魚であるエゾホトケとフクドジョウは、北海道の東北部からこの石狩低地帯にまで分布し、西南部では後者がごく一部の河川に見られるだけで、それも自然分布であることを疑われている(前川・後藤, 1982)。

こうしてみると、石狩低地帯の南部を占める勇払原野とそれをとりまく地域は、そのやせた火山灰の土壌と冷涼な気候にもかかわらず、一つには海岸、湖沼、河川、低湿地、台地、山腹などを含む habitat の多様さにより、また一つには北海道の生物相における東北的要素と西南部的要素の錯綜する位置的特性によって、植物相、動物相とも種類数が多く、多様性に富むところである。苫小牧東部開発計画をはじめとする開発行為によって、近年原野の変貌が大きく進みつつある中で、根釧原野、サロベツ原野と並ぶ北海道の代表的な原野として、勇払原野の特性の保存を望む声が少ない。

### 3. 勇払原野一帯の鳥類相に関する調査資料

勇払原野の鳥類に関する報告は、古くは斉藤(1940, 54)によるセイタカシギやムラサキサギ、カリガネの記録があり、また三島(1959)によるメジロに関する記述などがある。しかしこの地域一帯の鳥類相に関する報告がなされるようになったのは比較的近年になってからのことである。

その初期のものとして松木(1964)、伊賀(1967)、藤巻(1968)らの記録があげられる。その

中で、藤巻 (1968) は 1967~68 年の冬に行ったウトナイ湖の水鳥の観察結果から、17 種の鳥を報告している。ウトナイ湖とその周辺地帯の鳥類相についてはその後 FUJIMAKI and MATSUOKA (1972), 藤巻・松岡 (1973), 紀藤 (1973), 北川 (1974), 正富ら (1980), 佐藤 (1980) らによる報告や記述が行われている。

またウトナイ湖南側の砂丘から海岸線にかけては苫小牧市による鳥類調査が行われており (苫小牧市, 1980), 勇払原野東部にある鵠川河口部でのシギ, チドリ類を主とする観察記録としては見藤 (1971), 日本鳥類保護連盟 (1973), 萩 (1973, '76 a, '76 b), 羽田 (1974), 小林ら (1976), 小林 (1978), 井上 (1978) などがある。

一方森林性鳥類に関するものとしては、北大苫小牧演習林において調査が行われており、石城・松岡 (1972), 石城ら (1973), 石城 (1977), FUJIMAKI (1986) らの報告がある。

さらに、特定の鳥を対象としたものとしては白鳥に関する報告 (苫小牧市白鳥保護委員会, 1964・'66・'68・'75・'76; 伊賀, 1974), アオサギに関する調査報告 (苫小牧郷土文化研究会, 1968; 紀藤, 1978 a; 紀藤, 1978 b), 北大苫小牧演習林におけるキツキ類の生態学的研究 (松岡, 1978; 松岡, 1979; MATSUOKA, 1979; MATSUOKA and KOJIMA, 1979 a; MATSUOKA and KOJIMA, 1979 b, 石城ら 1987) やエゾフクロウの食性に関する報告 (松岡, 1977) などがあり、さらに稀少な鳥の飛来に関するものとしては野村 (1973), 北海道野鳥愛護会 (1973) によるコウノトリ, 野村 (1974) によるキンメフクロウ, 佐藤 (1974) によるハクガンの報告などがある。

こうした諸調査報告等のほかに、勇払原野一帯の鳥類相全般を把握しようとする試みがなされるようになったのは昭和 50 年代にはいつてからのことであり、それらの多くは開発計画に伴う環境事前評価, または自然保護行政の一環としてなされたものであった (苫小牧市, 1983; 北海道, 1980; 1981; 1984; 環境庁, 1980)。また、最近では日本野鳥の会苫小牧支部による鳥類リスト (日本野鳥の会苫小牧支部, 1986 a) が編纂され、この地域一帯の鳥類相の把握に大きく資するものとなった。

#### 4. 記録された種類と鳥類相の特色

上記の諸報告の内容を集め、これにその後のネイチャーセンターの観察日誌, 北大演習林での観察記録, さらに野鳥の会メンバーの個人的確認記録を加え、勇払原野一帯の地域でこれまでに記録された鳥の種類を Table 1 に示す。なお、この中で特に稀少な観察例や迷鳥と目されるものについての記録者, 観察年月 (日), 場所等は、筆者による記録も含めて日本野鳥の会苫小牧支部 (1986 b) に収録されている。

この表から、この地域ではこれまでに 18 目 51 科にわたる 277 種の鳥が記録されていることがわかる。このうちには一度またはときたまだけ記録された迷鳥 56 種が含まれており、それらを除く毎年見られる種類数は 219 種である。

さきにも述べたように、北海道全体ではこれまでに 389 種の鳥が記録されているが、それ

Table 1. Birds recorded in the Yufutsu Moor and its surrounding area

目 科 種	Order Family Species	Habitat (Locality)					Others
		Lake and around (Utonai-ko)	Marsh (Otarumappu & Tokisata- mappu)	Forest of Hokkaido Univ.	Coast and sea (Yufutsu & Azuma)	Town (Tomakomai City)	
アビ目	GAVIFORMES						
アビ科	Gabiidae						
アビ	<i>Gabia stellata</i>	○					
オオハム	<i>G. arctica</i>	○			○		○
カイツブリ目	PODICIPEDIFORMES						
カイツブリ科	Podicipedidae						
カイツブリ	<i>Podiceps ruficollis</i>	○	○				○
ハジロカイツブリ	<i>P. nigricollis</i>	○					○
ミミカイツブリ	<i>P. aurius</i>	○					○
アカエリカイツブリ	<i>P. grisegena</i>	○			○		○
カンムリカイツブリ	<i>P. cristatus</i>	○			○		
ミズナギドリ目	PROCELLARIIFORMES						
ミズナギドリ科	Procellariidae						
フルマカモメ	<i>Fulmarus glacialis</i>					○	
オオミズナギドリ	<i>Calonectris leucomelas</i>				○		
ハンボソミズナギドリ	<i>Puffinus tenuirostris</i>				○		
ペリカン目	PELECANIFORMES						
ウ科	Phalacrocoracidae						
ウミウ	<i>Phalacrocorax filamentosus</i>	○			○		
ヒメウ	<i>P. pelagicus</i>	○			○		
グンカンドリ科	Fregatidae						
オオグンカンドリ	<i>Fregata minor</i>	○					
コウノトリ目	CICONIFORMES						

サギ科	Ardeidae						
サンカノゴイ	<i>Botaurus stellaris</i>	○		○			○
ヨシゴイ	<i>Ixobrychus sinensis</i>						○
オオヨシゴイ	<i>I. eurhythmus</i>						○
アサマギ	<i>Bubulcus ibis</i>	○			○		○
ダイサギ	<i>Egretta alba</i>	○					○
チュウサギ	<i>E. intermedia</i>	○		○			○
コサギ	<i>E. garzetta</i>	○		○		○	○
アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>	○		○	○	○	○
ムラサキサギ	<i>A. purpurea</i>			○			○
コウノトリ科	Ciconiidae						
コウノトリ	<i>Ciconia ciconia</i>	○					○
トキ科	Threskiornithidae						
ヘラサギ	<i>Platalea leucorodia</i>	○					
ガンカモ目	ANSERIFORMES						
ガンカモ科	Anatidae						
シジュウカラガン	<i>Branta canadensis</i>	○					
コクガン	<i>B. bernicla</i>	○					
ハイイロガン	<i>Anser anser</i>	○					
マガン	<i>A. albifrons</i>	○					○
カリガネ	<i>A. erythropus</i>	○					
ヒシクイ	<i>A. fabalis</i>	○		○			○
ハクガン	<i>A. caerulescens</i>	○					
サカツラガン	<i>A. cygnoides</i>	○					
コブハクチョウ	<i>Cygnus olor</i>	○					○
オオハクチョウ	<i>C. cygnus</i>	○			○		○
コハクチョウ	<i>C. columbianus</i>	○				○	○
ツクシガモ	<i>Tadorna tadorna</i>	○					○
オンドリ	<i>Aix galericulata</i>	○			○		○



Table 1 Continued

目 科 種	Order Family Species	Habitat (Locality)					
		Lake and around (Utonai-ko)	Marsh (Otarumappu & Tokisata- mappu)	Forest of Hokkaido Univ.	Coast and sea (Yufutsu & Azuma)	Town (Tomakomai City)	Others
マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>	○	○	○	○	○	○
カルガモ	<i>A. poecilorhyncha</i>	○	○	○	○	○	○
コガモ	<i>A. crecca</i>	○		○	○	○	○
トモエガモ	<i>A. formosa</i>	○					
ヨシガモ	<i>A. falcata</i>	○	○				○
オカヨシガモ	<i>A. strepera</i>	○					○
ヒドリカモ	<i>A. penelope</i>	○	○		○		○
アメリカヒドリ	<i>A. americana</i>	○					○
オナガガモ	<i>A. acuta</i>	○		○	○		○
シマアジ	<i>A. querquedula</i>	○					○
ハンビロガモ	<i>A. clypeata</i>	○					○
ホシハジロ	<i>Aythya ferina</i>	○					○
オオホシハジロ	<i>A. valisineria</i>	○					○
キンクロハジロ	<i>A. fuligula</i>	○			○	○	○
スズガモ	<i>A. marila</i>	○			○		○
クロガモ	<i>Melanitta nigra</i>				○		
ビロードキンクロ	<i>M. fusca</i>	○			○	○	
シノリガモ	<i>Histrionicus histrionicus</i>				○		
コオリガモ	<i>Clangula hyemalis</i>	○			○		
ホオジロガモ	<i>Bucephala clangula</i>	○			○	○	○
ミコアイサ	<i>Mergus albellus</i>	○			○		
ウミアイサ	<i>M. serrator</i>	○			○		○
カワアイサ	<i>M. merganser</i>	○	○				○

ワシタカ目	FALCONIFORMES							
ワシタカ科	Accipitridae							
ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>	○						○
ハチクマ	<i>Pernis apivorus</i>			○				
トビ	<i>Milvus migrans</i>	○	○	○	○	○	○	○
オジロワン	<i>Haliaetus albicilla</i>	○	○	○	○	○	○	○
オオワン	<i>H. pelagicus</i>	○	○	○	○	○	○	○
オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	○	○	○	○	○	○	○
ツミ	<i>A. gularis</i>	○		○	○			○
ハイタカ	<i>A. nisus</i>	○	○	○	○		○	○
ケアジノスリ	<i>Buteo lagopus</i>	○		○	○			○
ノスリ	<i>B. buteo</i>	○	○	○	○			○
クマタカ	<i>Spizaetus nipalensis</i>	○		○	○			○
ハイイロチュウヒ	<i>Circus cyaneus</i>	○						○
チュウヒ	<i>C. aeruginosus</i>	○	○					○
ハヤブサ科	Falconidae							
シロハヤブサ	<i>Falco rusticolus</i>	○						○
ハヤブサ	<i>F. peregrinus</i>	○	○	○	○		○	○
チゴハヤブサ	<i>F. subbuteo</i>	○	○	○	○			○
コチュウゲンボウ	<i>F. columbarius</i>	○		○	○			○
チュウゲンボウ	<i>F. tinnunculus</i>	○		○	○		○	○
キジ目	GALLIFORMES							
ライチョウ科	Tetraonidae							
エゾライチョウ	<i>Tetrastes bonasia</i>	○	○	○	○			○
キジ科	Phasianidae							
ウズラ	<i>Coturnix coturnix</i>	○						○
キジ	<i>Phasianus colchicus</i>	○	○	○	○		○	○
ツル目	GRUIFORMES							
ツル科	Gruidae							

Table 1 Continued

目 科 種	Order Family Species	Habitat (Locality)					
		Lake and around (Utonai-ko)	Marsh (Otarumappu & Tokisata- mappu)	Forest (Exp. Forest of Hokkaido Univ.)	Coast and sea (Yufutsu & Azuma)	Town (Tomakomai City)	Others
クロヅル	<i>Grus grus</i>						○
タンチョウ	<i>G. japonensis</i>	○					○
カナダヅル	<i>G. canadensis</i>	○	○				
マナヅル	<i>G. vipio</i>	○					
アネハヅル	<i>Anthropoides virgo</i>	○					
クイナ科	Rallidae						
クイナ	<i>Rallus aquaticus</i>	○	○				
ヒメクイナ	<i>Porzana pusilla</i>	○					
ヒクイナ	<i>P. fusca</i>	○	○			○	○
シマクイナ	<i>P. exquisita</i>	○					
シロハラクイナ	<i>Amaurornis phoenicurus</i>						○
バン	<i>Gallinula chloropus</i>	○	○				○
オオバン	<i>Fulica atra</i>	○					
チドリ目	CHARADRIIFORMES						
チドリ科	Charadriidae						
コチドリ	<i>Charadrius dubius</i>	○	○		○	○	○
イカルチドリ	<i>C. placidus</i>	○					○
シロチドリ	<i>C. alexandrinus</i>	○			○		○
メダイチドリ	<i>C. mongolus</i>	○					○
ムナグロ	<i>Pluvialis dominica</i>	○					
ダイゼン	<i>P. squatarola</i>	○					
ケリ	<i>Microsarcops cinereus</i>	○					
タゲリ	<i>Vanellus vanellus</i>	○					○

シギ科

Scolopacidae

キョウジョシギ	<i>Arenaria interpres</i>	○
トウネン	<i>Calidris ruficollis</i>	○
ヒバリシギ	<i>C. subminuta</i>	○
オジロトウネン	<i>C. temminckii</i>	○
アメリカウズラシギ	<i>C. melanotos</i>	○
ウズラシギ	<i>C. acuminata</i>	○
ハマシギ	<i>C. alpina</i>	○
サルハマシギ	<i>C. ferruginea</i>	○
オバシギ	<i>C. tenuirostris</i>	○
エリマキシギ	<i>Philomachus pugnax</i>	○
キリアイ	<i>Limicola falcinellus</i>	○
シベリアオオハシシギ	<i>Limnordromus semipalmatus</i>	○
ツルシギ	<i>Tringa erythropus</i>	○
アカアシシギ	<i>T. totanus</i>	○
コアアシシギ	<i>T. stagnatilis</i>	○
アオアシシギ	<i>T. nebularia</i>	○
カラフトアオアシシギ	<i>T. guttifer</i>	○
クサシギ	<i>T. ochropus</i>	○
タカブシギ	<i>T. glareola</i>	○
キアシシギ	<i>T. brevipes</i>	○
イソシギ	<i>T. hypoleucos</i>	○
ソリハシシギ	<i>Xenus cinereus</i>	○
オグロシギ	<i>Limosa limosa</i>	○
オオソリハシシギ	<i>L. lapponica</i>	○
ダイシャクシギ	<i>Numenius arquata</i>	○
ホウロクシギ	<i>N. madagascariensis</i>	○
チュウシャクシギ	<i>N. phaeopus</i>	○
ヤマシギ	<i>Scolopax rusticola</i>	○

Table 1 Continued

目 科 種	Order Family Species	Habitat (Locality)					
		Lake and around (Utonai-ko)	Marsh (Otarumappu & Tokisata- mappu)	Forest (Exp. Forest of Hokkaido Univ.)	Coast and sea (Yufutsu & Azuma)	Town (Tomakomai City)	Others
タンギ	<i>Gallinago gallinago</i>	○	○				○
オオジンギ	<i>G. hardwickii</i>	○	○	○		○	○
アオシギ	<i>G. solitaria</i>			○			
セイタカシギ科	Recurvirostridae						
セイタカシギ	<i>Himantopus himantopus</i>	○					
ヒレアシギ科	Phalaropodidae						
ハイイロヒレアシギ	<i>Phalaropus fulicarius</i>					○	
アカエリヒレアシギ	<i>P. lobatus</i>	○		○	○		○
ツバメチドリ科	Glareolidae						
ツバメチドリ	<i>Glareola maldivarum</i>	○					○
トウゾクカモメ科	Stercorariidae						
トウゾクカモメ	<i>Stercorarius pomarinus</i>	○					
クロトウゾクカモメ	<i>S. parasiticus</i>	○					
カモメ科	Laridae						
ユリカモメ	<i>Larus ridibundus</i>	○			○		
セグロカモメ	<i>L. argentatus</i>	○			○		○
オオセグロカモメ	<i>L. schistisagus</i>	○			○		○
ワシカモメ	<i>L. glaucescens</i>	○			○		
シロカモメ	<i>L. hyperboreus</i>	○			○		
カモメ	<i>L. canus</i>	○			○		○
ウミネコ	<i>L. crassirostris</i>	○			○		
ズグロカモメ	<i>L. saundersi</i>	○					

ミツユビカモメ	<i>L. tridactylus</i>	○				○		
ハジロクロハラアジサシ	<i>Sterna leucoptera</i>	○						
クロハラアジサシ	<i>S. nigra</i>	○						
アジサシ	<i>S. hirundo</i>	○						○
コアジサシ	<i>S. albifrons</i>	○						
ウミスズメ科	Alcidae							
ウミガラス	<i>Uria aalge</i>					○		
マダラウミスズメ	<i>Brachyramphus marmoratus</i>					○		
ウミスズメ	<i>Synthliboramphus antiquus</i>					○		
コウミスズメ	<i>Aethia pusilla</i>					○		
ウミオウム	<i>A. psittacula</i>					○		
ハト目	COLUMBIFORMES							
ハト科	Columbidae							
キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	○	○	○		○		○
アオバト	<i>Sphenurus sieboldii</i>	○	○	○		○		○
ホトトギス目	CUCULIFORMES							
ホトトギス科	Cuculidae							
ジュウイチ	<i>Cuculus fugax</i>	○						
カッコウ	<i>C. canorus</i>	○	○	○		○		○
ツツドリ	<i>C. saturatus</i>	○	○	○		○		○
ホトトギス	<i>C. poliocephalus</i>	○						○
フクロウ目	STRIGIFORMES							
フクロウ科	Strigidae							
シロフクロウ	<i>Nyctea scandiaca</i>							○
トラフズク	<i>Asio otus</i>	○				○		
コミミズク	<i>A. flammeus</i>	○		○		○		○
コノハズク	<i>Otus scops</i>	○	○	○		○		○
オオコノハズク	<i>O. bakkamoena</i>			○		○		○

Table 1 Continued

目 科 種	Order Family Species	Habitat (Locality)					Others
		Lake and around (Utonai-ko)	Marsh (Otarumappu & Tokisata- mappu)	Forest (Exp. Forest of Hokkaido Univ.)	Coast and sea (Yufutsu & Azuma)	Town (Tomakomai City)	
キンメフクロウ	<i>Aegolius funereus</i>						○
アオバズク	<i>Ninox scutulata</i>			○		○	
フクロウ	<i>Strix uralensis</i>	○		○			○
ヨタカ目	CAPRIMULGIFORMES						
ヨタカ科	Caprimulgidae						
ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i>	○	○	○			○
アマツバメ目	APODIFORMES						
アマツバメ科	Apodidae						
ハリオアマツバメ	<i>Chaetura caudacuta</i>	○		○			○
アマツバメ	<i>Apus pacificus</i>	○		○		○	○
ブッポウソウ目	CORACIIFORMES						
カワセミ科	Alcedinidae						
ヤマセミ	<i>Ceryle lugubris</i>	○		○			○
アカショウビン	<i>Halcyon coromanda</i>			○		○	○
カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>	○		○		○	○
ヤツガシラ科	Upupidae						
ヤツガシラ	<i>Upupa epops</i>	○		○		○	○
キツツキ目	PICIFORMES						
キツツキ科	Picidae						
アリスイ	<i>Junx torquilla</i>	○	○	○			○
ヤマゲラ	<i>Picus canus</i>	○		○		○	○
クマゲラ	<i>Dryocopus martius</i>	○	○	○			○
アカゲラ	<i>D. major</i>	○	○	○		○	○

オオアカゲラ	<i>D. leucotos</i>	○		○		○	○
コアカゲラ	<i>D. minor</i>	○					○
コゲラ	<i>D. kuzuki</i>	○	○	○		○	○
スズメ目	PASSERIFORMES						
ヒバリ科	Alaudidae						
ヒバリ	<i>Alauda arvensis</i>	○	○	○	○	○	○
ツバメ科	Hirundinidae						
ショウドウツバメ	<i>Riparia riparia</i>	○	○				○
ツバメ	<i>Hirundorustica</i>	○		○		○	○
コシアカツバメ	<i>H. daurica</i>	○					
イワツバメ	<i>Delichon urbica</i>	○		○		○	○
セキレイ科	Motacillidae						
ツメナガセキレイ	<i>Motacilla flava</i>	○					○
キセキレイ	<i>M. cinerea</i>	○		○			○
ハクセキレイ	<i>M. alba</i>	○	○	○	○	○	○
セグロセキレイ	<i>M. grandis</i>	○	○	○		○	○
ビンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>	○	○	○			○
ムネアカタヒバリ	<i>A. cervinus</i>	○					
タヒバリ	<i>A. spinoletta</i>	○					○
サンショウクイ科	Campephagidae						
サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>	○	○				
ヒヨドリ科	Pycnonotidae						
ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	○	○	○		○	○
モズ科	Laniidae						
モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	○	○	○		○	○
アカモズ	<i>L. cristatus</i>	○	○			○	○
オオモズ	<i>L. excubitor</i>	○	○				
レンジャク科	Bombycillidae						
キレンジャク	<i>Bombycilla garrulus</i>	○		○		○	○



Table 1 Continued

目 科 種	Order Family Species	Habitat (Locality)					Others
		Lake and around (Utonai-ko)	Marsh (Otarumappu & Tokisata- mappu)	Forest (Exp. Forest of Hokkaido Univ.)	Coast and sea (Yufutsu & Azuma)	Town (Tomakomai City)	
ヒレンジャク	<i>B. japonica</i>	○		○		○	○
カワガラス科	Cinclidae						
カワガラス	<i>Cinclus pallasii</i>	○		○			○
ミソサザイ科	Troglodytidae						
ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i>	○	○	○		○	○
ヒタキ科	Muscicapidae						
(ツグミ亜科)	Turdinae						
ノゴマ	<i>Erithacus calliope</i>	○	○			○	○
コルリ	<i>E. cyane</i>	○	○			○	○
ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>					○	○
ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureoreus</i>	○		○		○	○
ノビタキ	<i>Saxicola torquata</i>	○	○	○		○	○
イソヒヨドリ	<i>Monticola solitarius</i>				○	○	○
マミジロ	<i>Turdus sibiricus</i>	○					○
トラツグミ	<i>T. dauma</i>	○	○	○		○	○
クロツグミ	<i>T. merula</i>	○	○	○			○
アカハラ	<i>T. chrysolaus</i>	○	○	○		○	○
シロハラ	<i>T. pallidus</i>	○		○		○	○
マミチャジナイ	<i>T. obscurus</i>	○				○	○
ツグミ	<i>T. naumanni eunomus</i>	○	○	○		○	○
ハチジョウツグミ	<i>T. n. naumanni</i>			○			
(ウグイス亜科)	Sylviinae						
ヤブサメ	<i>Cettia squameiceps</i>	○	○	○			○

ウグイス	<i>C. diphone</i>	○	○	○	○	○
エゾセンニュウ	<i>Locustella fasciolata</i>	○	○	○	○	○
シマセンニュウ	<i>L. ochotensis</i>	○				○
マキノセンニュウ	<i>L. lanceolata</i>	○				○
コヨシキリ	<i>Acrocephalus bistrigiceps</i>	○	○	○	○	○
オオヨシキリ	<i>A. arundinaceus</i>	○	○			○
メボソムシクイ	<i>Phylloscopus borealis</i>	○				○
エゾムシクイ	<i>P. tenellipes</i>	○	○	○	○	○
センダイムシクイ	<i>P. occipitalis</i>	○	○	○	○	○
キクイタダキ	<i>Regulus regulus</i>	○		○	○	○
(ヒタキ亜科)	Muscicapinae					
キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>	○	○	○	○	○
ムギマキ	<i>F. mugimaki</i>	○				○
オジロビタキ	<i>F. parva</i>			○		○
オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	○	○	○	○	○
サメビタキ	<i>Muscicapa sibirica</i>	○				○
エゾビタキ	<i>M. griseisticta</i>	○				○
コサメビタキ	<i>Muscicapa latirostris</i>	○		○		○
エナガ科	Aegithalidae					
エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	○	○	○	○	○
シジュウカラ科	Paridae					
ハシブトガラ	<i>Parus palustris</i>	○	○	○	○	○
コガラ	<i>P. moutanus</i>	○	○	○	○	○
ヒガラ	<i>P. ater</i>	○	○	○	○	○
ヤマガラ	<i>P. varius</i>	○		○	○	○
シジュウカラ	<i>P. major</i>	○	○	○	○	○
ゴジュウカラ科	Sittidae					

Table 1 Continued

目 科 種	Order Family Species	Habitat (Locality)					
		Lake and around (Utonai-ko)	Marsh (Otarumappu & Tokisata- mappu)	Forest (Exp. Forest of Hokkaido Univ.)	Coast and sea (Yufutsu & Azuma)	Town (Tomakomai City)	Others
ゴジュウカラ	<i>Sitta europaea</i>	○	○	○		○	○
キバシリ科	Certhiidae						
キバシリ	<i>Certhia familiaris</i>	○		○			○
メジロ科	Zosteropidae						
メジロ	<i>Zosterops japonica</i>	○	○	○		○	○
ホオジロ科	Emberizidae						
ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	○	○	○		○	○
シロハラオホジロ	<i>E. tristrami</i>	○					
ホオアカ	<i>E. fucata</i>	○	○	○		○	○
カシラダカ	<i>E. rustica</i>	○	○	○	○		○
ミヤマホオジロ	<i>E. chrysophrys</i>	○	○	○			○
シマアオジ	<i>E. aureola</i>	○	○			○	○
アオジ	<i>E. spodocephala</i>	○	○	○		○	○
クロジ	<i>E. variabilis</i>	○					
オオジュリン	<i>E. schoeniclus</i>	○	○			○	○
ユキホオジロ	<i>Plectrophenax nivalis</i>	○		○			○
アトリ科	Fringillidae						
アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>	○		○		○	○
カワラヒワ	<i>Carduelis sinica</i>	○	○	○	○	○	○
マヒワ	<i>C. spinus</i>	○		○			○
ベニヒワ	<i>Acanthis flammea</i>	○		○	○	○	○
ハギマシコ	<i>Leucosticte arctoa</i>	○		○		○	○
アカマシコ	<i>Carpodacus erythrinus</i>			○			

オオマンコ	<i>C. roseus</i>	○		○			○
ギンザンマシコ	<i>Pinicola enucleator</i>	○		○		○	○
イスカ	<i>Loxia curvirostra</i>			○		○	
ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>	○	○	○		○	○
ウソ	<i>Pyrrhula pyrrhula</i>	○		○		○	○
イカル	<i>Eophona personata</i>	○	○	○		○	○
シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	○	○	○		○	○
ハタオリドリ科	Ploceidae						
ニュウナイスズメ	<i>Passer rutilans</i>	○	○	○			○
スズメ	<i>P. montanus</i>	○	○	○	○	○	○
ムクドリ科	Sturnidae						
コムクドリ	<i>Sturnus philippensis</i>	○	○	○		○	○
ムクドリ	<i>S. cineraceus</i>	○	○	○		○	○
カラス科	Corvidae						
カケス	<i>Garrulus glandarius</i>	○	○	○		○	○
ホンガラス	<i>Nucifraga caryocatactes</i>			○			
ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	○	○	○	○	○	○
ハシブトガラス	<i>C. macrorhynchos</i>	○	○	○	○	○	○
計	277	247	96	118	52	101	182

鳥取県鳥獣保護法(石城)

らのうちから稀少な迷鳥を除くと北海道で毎年見られる鳥の種類数は約240種前後とみなされている(日本鳥類保護連盟, 1985)。勇払原野一帯で見られた鳥の総種類数は、全道のその約70%にあたり、また迷鳥の類を除いた毎年見られる鳥の種類数は、全道の場合の約9割に相当する数になっている。道内の一つの地域で記録されたものとしてはきわめて種類数が多いことがわかる。

記録されてきた鳥の種類数のこのような多さについては、いくつかの要因が考えられる。

その一つは、この地域の中には海岸・砂丘地帯、湖沼・湿原地帯、森林地帯などが含まれており、鳥類にとって多様な生息場所が存在することによると思われる。

Table 2はこの地域内の代表的生息環境としてウトナイ湖(湖沼とその周辺地帯)、トキサタマップ並びにオタルマップ(湿原地帯)、北大苫小牧演習林(森林地帯)および勇払・浜厚真(海浜地帯)をあげ、それぞれで記録された鳥を習性別に分けたものである。ウトナイ湖はその沿岸の北部にハンノキ、コナラ、エゾノコリンゴなどからなる低い森林を持つため、ここでは多数の森林性の鳥も記録されているが、記録された全種類数中の5割をこえる131種は水禽類で占められている。トキサタマップ、オタルマップでは湿原または草原性の鳥が3割近くを占め、水禽類とあわせて非森林性の鳥が5割をこえている。なおこの湿原地帯で記録されたものかなりの部分は、冬期に湿原周辺の疎林部分に観れたものであるとみてよい。これらに対して苫小牧演習林では記録された鳥のおよそ6割が森林性の鳥である。また湿原・草原性の種類として数えられているものの中にも林縁部と原野にまたがって生活する半森林性と呼ぶべきものが少なからず含まれている。海岸で記録されたものは水禽類が大部分であるが、それらの中心はカモメ類、ミズナギドリ類、海ガモ類などである。

このように、勇払原野の鳥類相は、場所によって種構成が大きく異なり、それによってこの地域全体の鳥類相を豊かなものにしていくといえる。

つぎに Table 2 と同じ4つの場所で記録された鳥を移動習性別に分けたものを Table 3 に示す。

北海道では夏鳥の種類数が多く、留鳥と冬鳥が少ないことが知られている。たとえば本州の温暖な地域の場合では留鳥が5割を越え、また冬鳥も3割前後を占めているのに対して夏鳥の比率はこれらよりずっと低い。これに対して北海道の場合は一般に夏鳥が4割以上を占め、留鳥は2割、また旅鳥が2割程度で冬鳥は1割以下と著しく少なくなっている。これは長い寒冷な季節を持つ北方地域の鳥類相の特色といえる。

しかし Table 3 を見ると、この地域全体では旅鳥が46種も見られていて、そのこともこの地方で記録された鳥の種類数を多くしていることがわかる。しかし、留鳥、夏鳥、冬鳥、旅鳥の比率は、生息場所ごとに大きく違っている。まず、旅鳥の多いのはウトナイ湖であることが目につく。旅鳥は他の3つの場所では数種ずつ見られているに過ぎないが、ウトナイ湖では46種を数え、ここで記録された鳥247種中の2割近くを占めている。この旅鳥は、ガンカモ科

Table 2. Numbers of species classified by habitats

Locality \ Habitat	Water and waterside	Marsh and glassland	Forest	Total
Lake and around (Utonai-ko)	131 (53.3)	43 (17.5)	73 (29.3)	247
Marsh land (Tokisatamappu & Otarumappu)	26 (27.1)	27 (28.1)	43 (44.8)	96
Forest (Experiment Forest of Hokkaido Univ.)	17 (15.5)	29 (24.1)	72 (60.3)	118
Coast (Yufutsu & Azuma)	45 (86.5)	5 (9.6)	2 (3.8)	52

( ) -%

Table 3. Numbers of species classified by the migration habits

Locality \ Migration habit	Resident	Summer visitor	Winter visitor	Transient	Straggler	Total
Lake and around (Utonai-ko)	36 (14.6)	77 (31.3)	42 (17.0)	46 (18.7)	46 (18.3)	247
Marsh land (Tokisatamappu & Otarumappu)	26 (27.1)	52 (54.2)	9 (9.4)	5 (5.2)	4 (4.2)	96
Forest (Experiment Forest of Hokkaido Univ.)	33 (28.4)	50 (43.1)	25 (19.8)	4 (3.4)	6 (5.2)	118
Coast (Yufutsu & Azuma)	9 (17.3)	10 (19.2)	22 (42.3)	6 (11.5)	5 (9.6)	52
Whole of district (including other area above mentioned)	43 (15.6)	81 (29.5)	51 (18.2)	46 (16.4)	56 (20.4)	277

( ) -%

8種、シギ・チドリ類25種などをはじめとする水禽類が中心をなしている。これらのほかに、ここでは冬鳥として数えられている水鳥の種類の中にもここを経由して渡りを行っている個体がきわめて多く、ウトナイ湖をはじめとする勇払原野の湖沼とその周辺の湿原が、日本列島の水禽類の渡りの中継基地として重要な意味を持っていることを示している。

また同じく Table 3 から、この地方は北海道としては冬鳥の種類も多い所であることがわかる。冬鳥が最も多く見られているのはウトナイ湖で、その中で多いのは水禽類である。一方苫小牧演習林内でも記録種数の約2割を占める23種の冬鳥が記録されており、北海道の森林としては冬鳥の多い所であることを示している。これはこの地域の森林が前にも述べたように多様な樹種の広葉樹を主体とするものであることによるとと思われる。これに対して冬期間中雪原

となるトキサタマップ、オタルマップの湿原地帯では、冬鳥の種類は少ない。また海岸地帯では記録された種類中で冬鳥の占める割合が最も高いが、これは北海道各地の沿岸部に広くみられる特徴といっている。

さらにこの地方の鳥類相に関して注目されるのは、この地方で記録された鳥の中には主として道西南部に分布域が限られているものと道東・道北には珍しくないが西南部にはほとんど見られないようなものの両方が含まれていることである。たとえば前者にはホトトギス、メジロ、ヤマガラなどがあり、後者にはシマセンニュウ、ノゴマなどがある。このことは、前にも述べたように植物や昆虫などにとって石狩低地帯が北海道内の東北部の亜寒帯性の要素と西南部の温帯性の要素が錯綜する地域になっていることと一致するものであるとみていいだろう。そして、これもまた、この地域の鳥類相を他の地方にくらべて多様なものになっているといえる。

最後に、もう一つここで注目されることは、この地方では迷鳥または稀少種と目されるものの記録が多いことである。これらの中にはシロハラクイナ、オジロビタキなど北海道における初記録であるばかりでなく全国的にもきわめて珍しい記録であるものや、サンカノゴイのようにかつては道内各地の湿原に生息していたことが知られているが現在ではきわめて稀少なものとなってしまっている種類などが含まれている。こうした迷鳥・稀少種の記録がこの地方で多いのは、この地方が北海道における鳥の渡りの重要なルートになっているためにそれらに混じっての迷鳥の飛来が多いことも考えられるが、同時にネイチャーセンターの常駐スタッフをはじめとする地元パードウォッチャーや研究者の活動が盛んであることによって、珍しい鳥の出現が的確に把握されるようになってきていることにもよると思われる。

## 5. おわりに

ここにとりまとめた結果からみて、勇払原野とその周辺を含む一帯の地域は、動物分類的にも生態的にも多様な多くの種類を含む、北海道における野鳥の宝庫の一つをなしているといっている。しかもここには北大苫小牧演習林とウトナイ湖ネイチャーセンターという二つの野鳥の研究・観察の拠点があり、今後も継続して研究活動、資料の集積や普及啓蒙活動が行われようとしている。

しかしながら、昭和30年代の後半に苫小牧港の建設による臨海工業基地の造成が行われて以来、勇払原野一帯には今回の受託共同研究が行われる契機となった高速道路の建設をはじめとするさまざまな開発行為が持ち込まれ、現在も苫小牧東部開発計画に基づく新たな巨大な掘り込み港の建設が原野の一角で行われている。それらに加えてさらに近年では石狩水系を人工水路で太平洋につなぐ千歳川放水路計画や勇振川改修計画などが持ち込まれ、勇払原野はさらに大きな変貌を迫られそうな情勢にある。

このような中であって、一方では自然保護や野鳥観察への関心の社会的高まりも著しく、勇払原野の自然やそこに住む動植物の価値も大きく見直されてきている。

今後、自然保護行政機関、自然保護団体、野鳥関係団体や研究者のそれぞれが開発計画に対して正しく対応し、論議を重ねることによって、この地方の特異で貴重な自然を守るとともに、多様な生息鳥類と資料の集積をふまえてここが北海道における野鳥の研究・観察・保護に関するますます大きな拠点となることを願って止まない。

## 謝 辞

本稿をまとめるにあたって観察日誌や確認情報などの貴重な資料の提供を受けたウトナイ湖ネイチャーセンター並びに日本野鳥の会苫小牧支部の各位に心からの謝意を表する。

また原稿の整理に多大な協力をしていただいた北海道大学苫小牧演習林の石井恵美子氏と調査、報告作製の間を通じて多くの援助を賜った同職員各位に厚くお礼申し上げる。

## 引用文献

- 1) 藤巻裕蔵 (1968): ウトナイ湖の水辺の鳥. 北海道自然保護協会誌, No. 4; 38-39.
- 2) FUJIMAKI, Y. and S. MATSUOKA (1972): The birds of Lake Utonai in autumn and winter. 鳥, 21 (91), 316-324.
- 3) 藤巻裕蔵・松岡 茂 (1973): ウトナイ湖の冬の水鳥類. 北海道自然保護協会誌, No. 11; 20-22.
- 4) FUJIMAKI, Y. (1986): Breeding bird community in a deciduous board-leaved forest in southern Hokkaido Japan. Jap. J. Ornithology, No. 35; 15-23.
- 5) 藤田郁雄 (1973): 苫小牧低地の地質と地史. 勇払原野総合調査報告書, 苫小牧市史編纂室.
- 6) 萩 千賀 (1973): 各地の干潟. 鶴川河口, 野鳥, No. 38; 12.
- 7) 萩 千賀 (1976 a): 北海道鶴川のセイタカシギ. 野鳥, No. 41; 494.
- 8) 萩 千賀 (1976 b): 干潟のシギ・チドリを想う. 林, No. 290; 45-48.
- 9) 羽田恭子 (1974): 昭和 49 年春の鶴川河口での観察記録. 北海道野鳥だより, No. 19-19; 7.
- 10) 北海道 (1980): 鳥獣現況調査. 勇払川改修工事環境調査報告書.
- 11) 北海道 (1981): 北海道における鳥類の地域別生息状況.
- 12) 北海道 (1984): 野生鳥類環境適応調査報告書.
- 13) 北海道生活環境部 (監修) (1985): きたの鳥たち. 野生生物情報センター.
- 14) 北海道野鳥愛護会 (1973): 勇払原野にコウノトリ. 北海道野鳥だより, No. 13; 11.
- 15) 伊賀岩太郎 (1967): ウトナイ湖周辺の野鳥と環境. 郷土の研究, No. 2; 92-98.
- 16) 伊賀岩太郎 (1974): ハクチョウ類の渡来地における環境保全とその保護区の範囲の設定について, 北海道ウトナイ湖の環境保全. 日本の野鳥, No. 2; 42-43.
- 17) 井上元則 (1978): 北海道鶴川河口の鳥保護の重要性. 鳥獣行政, 13 (3/4), 3-8.
- 18) 石城謙吉・松岡 茂 (1972): 北海道大学苫小牧演習林の鳥類相, その 1. 広葉樹天然林と針葉樹人工林における夏期の種構成と生息密度. 北海道大学演習林研究報告, 29 (1), 43-54.
- 19) 石城謙吉・松岡 茂・小川 巖 (1973): 北海道大学苫小牧演習林の鳥類相, その 2. 広葉樹天然林と針葉樹人工林における冬期の種構成と生息密度. 北海道大学演習林研究報告, 30 (1), 55-58.
- 20) 石城謙吉 (1977): 鳥類一冬期の種類相. 北海道における道路計画と森林環境の保全に関する調査研究, その 1; 26-31, 北海道大学演習林.
- 21) 石城謙吉・楠本義治・市瀬克也・斎藤 隆 (1987): クマゲラのヒナの外部形態と繁殖生態と記録. 北海道大学演習林研究報告, 44 (1), 225-230.
- 22) 環境庁 (1880): 動物分布調査報告書 (鳥類).
- 23) 見藤トシ子 (1971): 秋の鶴川探鳥会にて. 北海道野鳥だより, No. 8; 10.
- 24) 北川聖治 (1974): 勇払原野の鳥たち. 林, No. 268; 44-46.



- 25) 紀藤義一 (1973): 鳥類分布から見た苫小牧湿原の特性について. 苫小牧地区自然保護関係調査報告書, 昭和47年度; 42-44.
- 26) 紀藤義一 (1978 a): 明野アオサギコロニー調査報告書. 苫小牧自然保護協会.
- 27) 紀藤義一 (1978 b): アオサギコロニー調査報告. 郷土の研究, No. 4; 98-105.
- 28) 小林清勇・萩千賀・羽田恭子 (1976): 昭和50年秋の鷯川河口観察記録. 北海道野鳥だより, No. 22; 6-7.
- 29) 小林清勇 (1978): 鷯川におけるシギ・チドリ分布状況. 北海道野鳥だより, No. 34; 3-6.
- 30) 河野広道 (1933): 蝶類の分布より見たる北海道一特に石狩低地帯の意義. 昆虫, 7 (2), 86-88.
- 31) 工藤祐舜・吉見辰三郎 (1916): 苫小牧演習林野生植物調査報告書. 東北帝国大学農科大学演習林研究報告, No. 4; 1-62.
- 32) 前川光司・後藤晃 (1982): 川の魚たちの歴史. 中央公論社.
- 33) 正富弘之・小山政弘・長井博 (1980): ウトナイ沼およびその周辺の鳥類相. 野生生態環境実態調査報告書, 63-130.
- 34) 松岡茂 (1977): 苫小牧演習林における冬期のフクロウの食性について. 北海道大学演習林研究報告, 34 (1), 161-174.
- 35) 松岡茂 (1978): キツツキ類の種間関係. 哺乳類科学, No. 36; 15-16.
- 36) 松岡茂 (1979): オオアカゲラの早い繁殖開始の生態的意義. 鳥, Vol. 28; 213.
- 37) MATSUOKA, S. (1979): Stomach contents of nestling of gray-headed green woodpecker *Picus canus*. 山階鳥類研究, 11 (2), 43-44.
- 38) MATSUOKA, S. and K. KOJIMA (1979 a): Contents of fecal droppings collected in a nest of the black woodpecker *Dryocopus martius*. 鳥, Vol. 28; 97-98.
- 39) MATSUOKA, S. and K. KOJIMA (1979 b): Winter food habits of grey-headed green woodpecker *Picus canus*. 鳥, Vol. 28; 107-116.
- 40) 松木勝彦 (1964): ウトナイ湖とその周辺の野鳥. 郷土の研究, No. 1.
- 41) 三島冬嗣 (1959): 八重山列島産及び北海道産のメジロの亜種の価値. 鳥, Vol. 15; 29-35.
- 42) 中居正雄 (1973): 勇弘原野の植生. 勇弘原野総合調査報告書. 苫小牧市史編纂室.
- 43) 中尾清蔵 (1939): 苫小牧演習林地質調査報告書. 北海道大学演習林研究報告, 11 (2), 27-65.
- 44) 日本鳥学会 (1974): Check-lists of Japanese Birds. (Fifth Edition). 学習研究社.
- 45) 日本鳥類保護連盟 (1973): 鷯川河口. 干潟鳥類保護関係調査報告書; 16-18.
- 46) 日本鳥類保護連盟 (監修) (1985): 北海道の鳥. 小学館.
- 47) 日本野鳥の会苫小牧支部 (1986 a): 苫小牧の野鳥. 日本野鳥の会苫小牧支部
- 48) 日本野鳥の会苫小牧支部 (1986 b): 苫小牧の野鳥補稿. 日本野鳥の会苫小牧支部.
- 49) 野村悟郎 (1973): コウノトリ情報 I, 北海道のコウノトリ. 鳥獣行政, 8 (2), 14.
- 50) 野村悟郎 (1974): キンメフクロウ. 鳥獣行政, 10 (2), 14.
- 51) 斉藤春雄 (1940): 北海道に於て捕獲せられたセイタカシギについて. 鳥, Vol. 10; 723-724.
- 52) 斉藤春雄 (1954): 北海道におけるムラサキサギとカリガネ. 鳥, Vol. 13; 14-19.
- 53) 佐藤辰夫 (1974): ウトナイ湖にハクガン飛来. No. 39; 490.
- 54) 佐藤辰夫 (1980): ウトナイ湖とその周辺の鳥類. 北海道野鳥だより, No. 41; 3-9.
- 55) 館脇操 (1940): 北日本森林樹種の分布. 北方林業会講演集, No. 1; 1-19.
- 56) 苫小牧郷土文化研究会 (1968): 埋められたアオキギ営巣地. 北海道自然保護協会誌, No. 4; 34-37.
- 57) 苫小牧市 (1974): 苫小牧地区自然保護関係調査報告書.
- 58) 苫小牧市 (1980): ウトナイ湖南東部砂丘周辺の鳥類相. ウトナノ湖南東部自然環境調査報告書; 33-42.
- 59) 苫小牧市 (1983): 野鳥生態等調査.
- 60) 苫小牧市白鳥保護委員会 (1964): 苫小牧の白鳥 (白鳥調査報告書) 第一集.
- 61) 苫小牧市白鳥保護委員会 (1966): 苫小牧の白鳥 (白鳥調査報告書) 第二集.
- 62) 苫小牧市白鳥保護委員会 (1968): 苫小牧の白鳥 (白鳥調査報告書) 第三集.
- 63) 苫小牧市白鳥保護委員会 (1975): 苫小牧の白鳥 (白鳥調査報告書) 第四集.
- 64) 苫小牧市白鳥保護委員会 (1976): ウトナイ湖白鳥飛来表. 日本の白鳥, No. 3; 42-43.

### Summary

The species of birds which have been recorded in the Yufutsu Moor and its surrounding area, the Pacific coast side of the Ishikari Lowland, were compiled into a list and reported.

Two hundred and seventy-seven species of birds, 51 families of 18 orders, representing about 70 percent of the total species recorded in the whole of Hokkaido, have been observed in this district.

The Yufutsu Moor district contains various habitats for birds, such as ponds, marshy grasslands, and except for the southern coastal side, most of them are surrounded by low hills covered by the broad-leaved forest. The diversity of habitats influence the variety of bird types: sea birds, freshwater-falls, marsh birds, grassland birds and forest birds.

At Lake Utonai, which is the largest pond in this district, and its surrounding moor, 46 species of transient birds, consisting mainly of wading birds, were recorded, and furthermore, a large number of winter water-falls were observed to continue migrating after stopping briefly in this area, with only a few individuals staying through out the winter. Therefore, the Yufutsu Moor was considered to be a very important route of migrations for many species of water birds.

Another feature of the avifauna in this district, in addition to those mentioned above, has to found with the fact that this region is a transition zone from the biogeographic viewpoint, consisting of the temperate species distribute mainly in southwestern part of Hokkaido and subarctic species most of which are observed in northeastern part of Hokkaido. The formers recorded in this district are the Japanese White-eye, *Zosterops japonica*, the Varied Tit, *Parus varius*, and the Little Cuckoo, *Cuculus poliocephalus*, and the latter are the Middendorff's Grasshopper Warbler, *Locustella ochotensis*, and the Siberian Rubythroat, *Erithacus calliope*.